

都市中流一戸建住宅の収納空間に関する調査研究

——収納空間及び収納物の実状について——

関川 千尋・北川 敏子・市川 裕美

The Survey Concerning Storage Space of Detached Housing Owned
by the Urban Middle Class:

— The Actual Circumstances of Storage Space and Stored Items.—

Chihiro SEKIKAWA, Toshiko KITAGAWA, and Hiromi ICHIKAWA

Received April 30, 1986

抄録：我々は、都市中流一戸建住宅の収納空間の実状と問題点を明らかにするため、大阪府枚方市くずはローズタウンの持家一戸建住宅家庭を対象としアンケート調査を実施した。調査時期は、'84年9月下旬から10月上旬であり、調査票回収数264票、回収率89.2%、有効票数247票であった。調査の分析結果は、以下のとおり要約される。

1). 対象地は、'68年頃から民間電鉄会社および日本住宅公団により共同開発された、中流の持家一戸建住宅の団地であり、今回の調査対象となった家庭は、世帯主平均年齢51.6才、平均年収923.3万円、平均家族人数3.95人、世帯主の72.1%の職業がホワイトカラー層であった。

2). 住宅の平均敷地面積は、231m²（約70坪）、平均住宅面積は、123.4m²（約37.4坪）であり、これらの住宅の収納空間は、屋外収納空間が平均10.6m²、屋内収納空間が平均21.7m²であった。また、各家庭は、生活用品の増大化に伴い収納物品も増え、収納空間の絶対量を増やすことでこれに対処しようとする傾向があった。

3). 多くのタイプの収納空間の中でも、近年、納戸・屋根裏部屋所有指向があり、特に納戸は、対象家庭の4割が所有していた。

4). 約半数の対象家庭に、収納しきれないで、はみ出している物品があった。

5). 収納空間に対する各家庭の評価では、不満足層が約3分の1存在し、特に収納空間の狭さ及び、前述4)の収納しきれない物品の存在が、マイナスの評価を与えていた。

6). 1)～5)の実状にもとずき、住宅の適切な収納空間を考える場合、その前提条件として、物の持ちすぎの解消、地域のリサイクルシステムの必要性などが指摘・考察された。

索引語：収納空間、一戸建住宅、納戸、収納物

Abstract. We took a survey by the questionnaire method on detached house homes in Kuzuha Rose Town, Hirakata City, Osaka in order to clear up both the actual circumstances & the point at issue of storage space of detached housing owned by the urban middle class. It was taken in late September to early October, 1984. The

number of replies received was 264 out of 296, its ratio being 89.2%.

The result of the analyzed questionnaires is summarized as follows;

1. The place where the survey was taken has been codeveloped by both the private railway company and the Japan Housing Corporation. This place has a housing development consisting of detached houses owned by the middle class. As far as homes on which the survey was taken are concerned, the average age of the household heads was 51.6, the average annual income was 9,233,000 yen, the average number of the families was 3.95 and besides, 72.1% of the household heads were white-collar workers.

2. The average land area of the whole housing: 231 m², the average floor area: 123.4 m². Referring to storage space of each home, outdoor storage space averaged 10.6 m² while indoor storage space averaged 21.7 m².

3. Store-rooms or attics have recently inclined to be possessed, although there are various types of storage space. And it has turned out that 40% of the families surveyed have in particular owned store-rooms.

4. We have found out that about half of the families surveyed have too many commodities to put away in storage space, and it has ended up that some of them can not be stored.

5. The opinions of each home toward storage space are that some one-third are dissatisfied, inasmuch as not merely is storage space confined, but also items which cannot be stored as mentioned above 4 are in existence.

6. When we consider adequate storage space of housing on the basis of actual circumstances of above 1 to 5, it has been pointed out and studied, on the premise condition, that we should refrain from having too many commodities, and that recycling in each region is necessary.

Key words: storage space, detached house, store room, stored items.

1. 緒 言

第二次世界大戦直後、¹⁾ 我国において住宅数の不足が問題となったが、昭和43(1968)年には住宅数が世帯数を上回り、住宅の量に関する問題はいちおうの解決をみたといわれている。しかしながら、相対的居住水準の上昇を背景に、依然として狭さを不満とする層も多く、必ずしも樂觀できない面を残している。²⁾ また、前述のような戦後の居住水準の平均的な上昇を背景に、近年居住の快適さを問題にする住宅問題の質的側面への取り組みが注目されてきている。居住水準をはかる指標として、現在、総務庁の住宅統計調査などでは、台所や浴室などを中心とする設備状況を採用しているが、これらの指標にやがて、冷暖房や居室以外のゆとり空間、例えば押入れなどの状況が問題とされる時代がくることが予想される。

ここでは、これからの豊かな住生活において問題とされるであろう収納空間に視点をあてることにする。

明治から戦前の都市中流以上の住宅には、物入れとしての納戸や押入れがあった。しかし、戦後の住宅では最低限度の居住空間を確保するために、収納空間ができるだけきりつめられた。同時に、戦災により所有物の量も減少し、収納のための空間をそれほど多くとる必要もなかった。昭和20年代後半から人々の生活も次第に落ち着きを取りもどし、新しく建築される都市住宅でも、最低限度の居住空間の確保が当面の目標とされた。まだこの時代、国民の住宅水準は、不急の空間、例えばベランダ、玄関、押入れなどが十分確保されるには至っていない。しかし一方では、

庶民の住生活を除くくらしは徐々に豊かになり、多種多様の生活用品が出回るようになってきた。企業の多彩な宣伝と、家計の購買力の増大により、ものの持ちすぎの問題と、収納空間の狭さの問題が表面化してきた。

従来一般に、住宅を設計する場合、収納空間の適当な大きさを決定するために、一般的な家庭の持ち物の数を調査し、それぞれの物品の標準的な大きさから算出した空間を設定するのがオーソドックスな方法である。しかしながら現実には、各家計や公団、公社、公営住宅などの住宅供給主体の経済能力に足をひっぱられ、まず生活に必要な空間（居室部分など）が優先されることになり、収納空間にまで目が届かないのが実状である。また一般には、個々の家庭の特性を想定できるほど豊かでないので、各家庭の収納空間に対するニーズには完全に答えられていない状況にある。しかし、近年部分的ではあるが、居住空間にはほぼ満足のいく階層、特に中産持家階層等では、その住宅プランなどから、収納空間見直しの様子をうかがうことができる。

本研究では、現在比較的豊かな住生活を先取りしていると思われる都市中流住宅に焦点をあて、その収納の実状と問題点を明らかにすることを目的とする。またあわせて、今後望ましい収納空間のあり方について考察を加えたい。

2. 方 法

生活にある程度ゆとりがあり、収納空間にまで目を向けられる階層が居住していると思われる都市中流一戸建住宅を対象とし、収納空間に関するアンケート調査を実施した。対象地には枚方市のくずはローズタウンを選んだ。

表1 アンケート実施概要

調査期間	昭和59年9月27日～10月12日
配布数	296 票
回収数	264 票
回収率	89.2%
有効数	247票

調査項目の概要は、①収納空間の実状、②収納空間に対する意識及び評価、③住宅の状況、④家族の状況などである。調査票配布、回収は研究者が直接行い、一週間留め置いた後、回収する方法をとった。

実施概要は表1に示す通り、配布数296票、回収率89.2%であった。

3. 結 果

(1)調査対象の概要

1)対象地の概要

くずはローズタウンは、京阪電鉄が日本住宅公団と共に、昭和43年頃から分譲を開始した中流住宅地である。当地は、図1に示すように、大阪府枚方市と京都府八幡市にまたがり、京阪神のベッタタウンとして開発された。今回の調査では、枚方市の美咲、朝日、青葉地区を対象とした。

2)対象家庭の概要

対象家庭の概要は表2に示す通りである。

居住住宅の広さは、平均123.4㎡で、75～150㎡が全体の80%を占めている。大都市圏新築持家で昭和43年以降に建てられた住宅の面積110.7㎡³⁾と比較して、広い結果が出ている。住宅の種

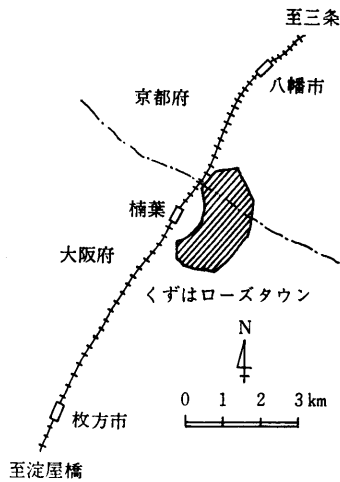


図1 くずはローズタウン

表3 収納空間の分類

屋外	常設的物置	ユニット式物置 独自につくった物置
	仮設的物置	ガレージ 雨天時物干場の利用
はみ出し収納		
屋内	固定型収納空間	●納戸 ●屋根裏部屋 ●居間の押入れ ●客間の押入れ ●家族室の押入れ ●階段下 ●廊下の押入れ ●独立した押入れ ●床下収納庫
		移動型収納空間
		はみ出し収納

今回の調査に先だって、我々は都市一戸建住宅にある収納空間のタイプを、表3のように予想分類した。そしてこれらのタイプ別収納空間について、数、大きさ、収納物の分析検討という形で研究を進めることにした。以下、これらの分類を参考に、屋外収納、屋内収納などの実態につ

表2 対象家庭の概要

住宅の面積	123.4㎡
敷地の面積	231.8㎡
世帯主年齢	51.6歳
実家族人数	3.95人
年収	923.3万円

類は、注文住宅が60.7%、分譲住宅が32.0%であった。

家族人数は4人が35%と最も多く、3～5人が75%を占める。平均家族人数は3.95人で、昭和58年全国平均3.25人⁴⁾に比べると、かなり高い数値といえる。これは、本調査において、単独世帯が0%であり、全国平均の18.1%⁵⁾と比べ大きなひらきがあるためと思われる。

世帯主の年齢は50歳代が最も多く、次いで40歳代、60歳以上となる。世帯主平均年齢は51.6歳で、かなり成熟した住宅地であることがうかがえる。

対象世帯の年収は、800万円～1000万円が最も多く、全体の21.5%を占める。200万円～400万円の世帯は15件あったが、年金生活者がほとんどであった。平均年収は923.3万円⁶⁾で、家計調査年報の同時期の調査で、全都市持家勤労者家計の実収入533.5万円と比較して、かなり高く、経済力のある階層といえる。

以上のように、調査対象のくずはローズタウンは、かなり成熟した、しかも高い水準にある住宅地であるといえよう。

(2)対象地の収納の実態

いて述べてゆくことにする。

1) 屋外収納

屋外収納の所有状況は、表4に示す通りである。屋外収納庫は全体の96.0%の家庭が所有しており、そのうち84.0%の家庭が平均10.6㎡の常設的物置を所有していた。

仮設的物置についてみると、ガレージは54.0%の家庭が所有しており、住宅の種類別では、分譲住宅に少なく注文住宅に多い。ガレージの面積は平均17.3㎡^(注1)、雨天時の物干場は平均9.5㎡であった。

表4 屋外収納空間の所有状況

		所有率(%)	大きさの平均
常設的物置	ユニット式物置 独自につくった物置	84.0	10.6㎡
仮設的物置	ガレージ	54.0	17.3㎡
	雨天時物干場の利用	20.3	9.5㎡

屋外収納空間の収納物については、表5のようになった。常設的物置の収納物は、自由記入方式で平均4.3個の記入状況であり、冷暖房器具・季節用品、園芸用品・肥料が多かった。仮設的物置は記入件数の平均が2.5個であり、自転車、自動車が多く入っていた。

屋外収納空間に納まりきらずにはみ出しているものは、平均1.7個の記入状況で、自転車46件、園芸用品・肥料26件、空缶・空ビン12件、はしご、脚立11件、家具9件と続き、主にひさしの下に置かれていた。

表5 屋外収納空間の収納物（上位5つ）

常設的物置	件数	仮設的物置	件数
冷暖房器具・季節用品	96	自転車	107
園芸用品・肥料	88	自動車	95
スポーツ・レジャー・趣味用品	42	バイク	36
食料品	40	子どもの遊具	15
大工用具	38	園芸用品・肥料	11

以上、対象地においてほとんどの家庭が、敷地内にかなりの面積を占める常設的物置を所有していた。また、専用目的をもつガレージや雨天時物干場でも目的以外の多くの収納物を収納している様子もうかがえたが、それでもなお納まりきらないものが多くあることが明らかになった。

2) 屋内収納

i) 固定型収納空間一つくりつけ押入れー

屋内一つくりつけ収納空間は、表6のような形で分布していた。すなわち、納戸^(注2)、屋根裏部屋、居間の押入れ、客間の押入れ、家族室の押入れ、階段下、廊下、独立した押入れ、台所床下である。^(注3)

表6 屋内つくりつけ収納空間の所有状況

	納戸	屋根裏部屋	居間	客間	家族室	階段下	廊下	独立した押入れ	床下収納庫
大きさの平均(m ²)	16.3	14.4	3.8	3.3	7.4	2.9	2.1	2.4	1.3
記入件数	98	18	70	60	117	45	41	30	15
% (分母 247)	39.7	7.3	28.3	24.3	47.4	18.2	16.6	12.1	6.1

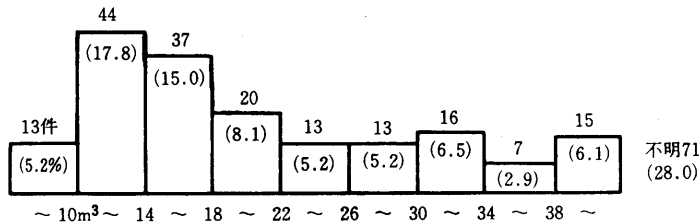


図2 屋内収納空間全体の大きさ

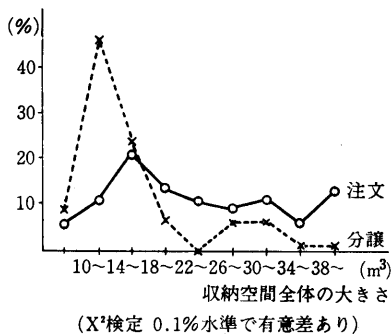


図3 収納空間全体の大きさと住宅の種類

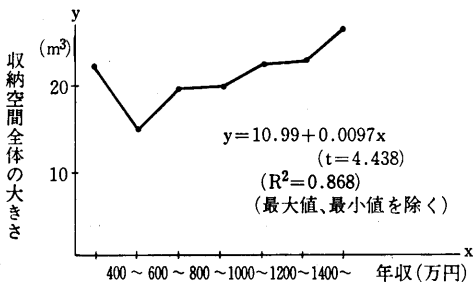


図4 年収と屋内収納空間全体の大きさ（平均値）

収納空間の大きさの平均は、居間、客間の押入れが3.8m²、3.3m²で奥行半間（90cm）、間口1間（180cm）強、家族室の押入れが7.4m²で同じく2間（180cm×2……以下省略）強であった。なお納戸の大きさの平均は16.3m²で4.5畳相当であり、約4割の家庭が所有していた。

これらの調査結果から、各家庭ごとに、屋内つくりつけ収納空間の大きさを合計し、屋内収納空間全体の大きさを算出した。分布状況は図2の通りで、平均21.7m³であった。

屋内収納空間全体の大きさと住宅の種類との関係についてみると、図3のように収納空間の大きさが小さいものは分譲住宅に多く、極端に大きいものは注文住宅であった。

次に年収との関係についてみると図4の通り、年収が高いほど収納空間の大きさが大きかった。なお、年収が400万円未満の家庭は、ほとんどが年金生活者であるが、現在の年収の割に収納空間の大きさが比較的大きかった。

表7 屋内つくりつけ収納空間の収納物（上位3つ）

納戸 (298)	件数	家族室 (391)	件数
家具	66	寝具	91
衣類	44	衣類	76
冷暖房器具・季節用品	32	本・アルバム類	32

屋根裏部屋 (46)	件数	階段下 (77)	件数
冷暖房器具・季節用品	10	掃除用具	19
家具	4	食器・台所用品	9
衣類	4	衣類	7
食器・台所用品	4	大工道具	7
		古新聞など	7

居間 (176)	件数	廊下 (92)	件数
衣類	51	掃除用具	13
寝具	44	冷暖房器具・季節用品	9
座布団	12	寝具	9

客間 (109)	件数	独立した押入れ (85)	件数
寝具	48	食器・台所用品	13
衣類	17	掃除用具	11
座布団	15	食料品	8

() は収納物記入件数

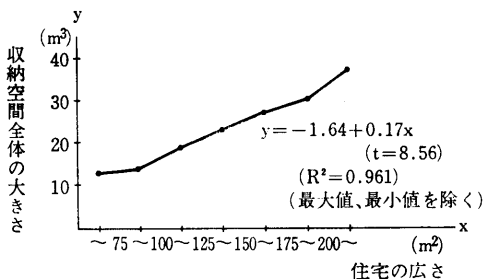


図5 住宅の広さと屋内収納空間全体の大きさ (平均値)

住宅の広さ別に屋内収納空間の大きさの平均値を算出しグラフ化すると、図5のようになった。住宅の面積が大きくなればなるほど、収納空間の大きさが大きくなるといえる。図4、図5の比較から、収納空間の大きさは、住宅の広さにより説明されるところが大きいようである。

各屋内つくりつけ収納空間の収納物についても自由記入方式で調査した。結果を表7に

示す。納戸、屋根裏部屋には家具、冷暖房器具・季節用品などが多く、比較的大きいものが収納されていた。居間、客間、家族室の押入れには、衣類、寝具が多く、また階段下、廊下の押入れには、掃除用具が多く収納されていた。

次に、これらつくりつけ収納空間収納物の使用頻度について調べた。各収納場所に入れている各収納物について、Aよく使う、B時々使う、C季節や行事により使う、Dほとんど使わないの4つに分類して集計したのが図6である。なお、当調査の調査時期が、使用頻度の結果に反映し

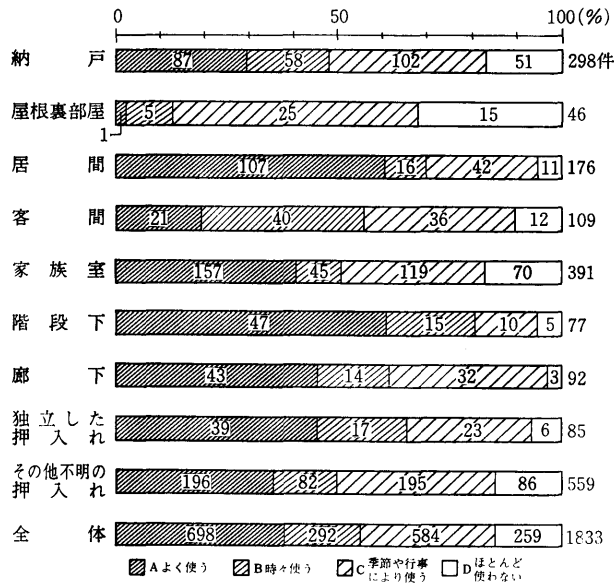


図6 収納場所別収納物の使用頻度

ていることに留意する必要がある。

納戸は、時々使うものや、季節や行事により使うものが多くなっている。屋根裏部屋は、出し入れが不便なこともあって、季節や行事によって使うものやほとんど使わないものが86.9%を占める。居間は日常よく使うものが60.8%で、ほとんど使わないものは6.2%にすぎない。それに対して客間は、よく使うものは19.3%と少なく、時々使うものが36.7%と他の収納場所に比べてかなり多くなっていた。これは客間には客用品（布団や座布団など）を多く収納しており、客の来る割合が頻度Bにあたるためであろう。家族室は全体と比べると、ほとんど使わないものの割合がやや多くなっている。これは使わなくなった本やおもちゃ、節句飾りなどによる。階段下は日常よく使うものが61%を占めているが、この理由は、掃除用具や衛生用品を収納している家庭が多いからである。廊下や、独立した押入れの収納物も比較的よく使われている。^{注5)}

これらの分析から、それぞれの家庭が、部屋の用途を目安に、収納物と使用頻度を考えあわせて収納している実態が観察された。

以上、屋内つくりつけ収納空間は、平均21.7㎡と住宅内においてかなりの大きさの空間を占めていること、また各種の機能をもつ収納空間で収納物の特性に沿った収納がされていることが明らかにされた。

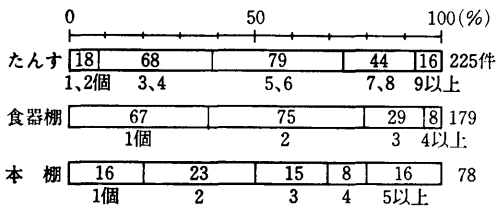


図7 屋内収納家具の個数

ii) 移動型収納空間——屋内収納家具——

対象地の屋内収納家具使用状況について、自由記入方式で、収納家具名、数、大きさ、収納物品のうちの不要品の割合を調査した。収納家具としては、たんす、食器棚、飾棚、本棚、はきもの入れについて集計した。家具

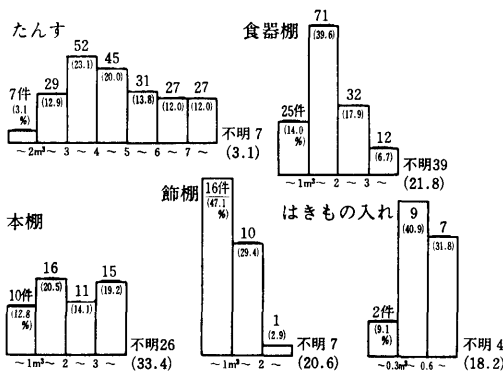


図8 屋内収納家具の大きさ

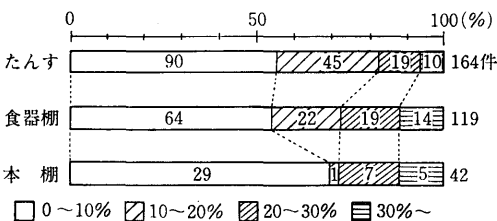


図9 屋内収納家具 収納物不要品割合

の大きさや、不要品割合等は、煩雑な調査のため、“不明、が多いが、回答結果のみを分析するだけでも内容把握の一助となると考えた。結果を図7, 8, 9に示す。

たんすの個数は1戸に平均5.3個あり、3~8個の家庭が85%を占める。大きさは、1家庭あたり平均4.8㎡であった。収納物不要品割合は、55%の家庭で10%未満（よく使っている）となっていた。ここで、洋服だんすは不要品割合が低く、和だんすは高かった。これは、以前に比べ和服は、着用する機会が少なくなったものの、伝統的嫁入り道具の1つとして所有しており、併行して和だんすも所有しているというケースが多いためである。また同時に、使用していなくても衣類等は、耐久年数が長いことなどから、なかなか処分できない状況を示すものでもある。

食器棚の個数は1戸に平均1.9個あり、大きさは1戸あたり平均1.7㎡、収納物不要品の割合は半数が10%未満（よく使っている）

であるが20%以上も約3割を占める。

本棚の個数は1戸に平均2.8個で、大きさの平均は1戸あたり2.1㎡であった。収納物不要品の割合は10%未満（よく使っている）が約7割を占める。これは、不要な本は本棚に入れずに、押入れや物置などの他の収納場所に収納するか、捨てるかするため、本棚には日常使用するものや、百科辞典のように日頃使わなくても今後使うと思われるものが収納されているからであろう。

飾棚は、2㎡未満の大きさで、1個または2個あり、収納物不要品の割合は10%未満（よく使っている）が75%を占める。

はきもの入れは1個が16件、2個以上が6件で、大きさは0.3~0.6㎡が50%を占める。

以上の分析から、各家庭は、たんす、食器棚、本棚などあわせて奥行半間の押入れ3間強の体積に相当する屋内収納家具を所有していることが明らかにされた。またそれらの収納品のうち、あまり使用しないものは比較的少なく、日常用いるものが多くを占めているように思われる。

iii)はみ出し収納——はみ出しているもの——

屋内で、押入れなどの収納空間にも、収納家具にも入りきらずにはみ出しているものは、対象者全体の46.2%が“あり、と答えている。置き場所としては、たんすの上が一番多く、食器棚・冷蔵庫の上、部屋のすみ、ベッドの下、廊下・階段などとなっていた。

たんすの上には、衣類、かばん類、帽子、寝具などが箱などに入れられて置かれていた。その他の場所には、本・アルバム類、衣類、スポーツ・レジャー・趣味用品が置かれていた。

ところで、はみ出しているものの置き場所として、たながあげられるが、今回の調査では明らかにできなかった。しかし、今日の住宅においては、従来に比べて天井高が低くなってきており、

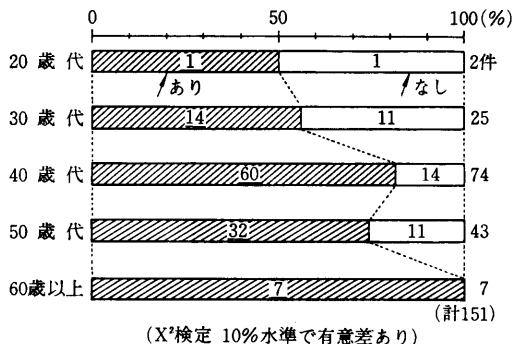


図10 はみ出し収納の有無と妻の年齢

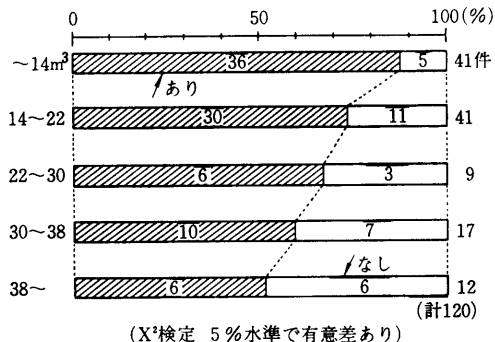


図11 はみ出し収納の有無と収納空間の大きさ

たなをものの置き場所として利用することは少なくなっていると考えられる。

ここで、はみ出し収納が起こる要因について検討した。その結果、⁷⁾“妻の年齢差”、“屋内収納空間の大きさ”、とが“はみ出し収納の有無”に有意な差をもたらすことがわかった。

図10によると、妻の年齢が高いほど、はみ出しているものがある家庭が増える傾向にあることがわかる。これは、妻の年齢が高くなるにつれて、所有物の量が増大することによって考えられる。

また図11によると、屋内収納空間が小さいほど、はみ出しているものがある家庭が多くなる傾向があった。

以上i), ii)で検討したように、各家庭とも屋外収納空間、屋内つくりつけ収納空間、屋内収納家具など各種の収納空間が、物品を収納している様子がうかがえた。しかしながら、iii)では、

なお約半数の家庭に収納しきれない物品があることが明らかにされた。

(3)対象家庭の収納空間への意識と評価

(2)では、対象家庭における収納の実態について報告したが、ここではそれらの収納空間を使用者がどのように評価しているのか、また収納空間についてどのような考えをもってしているのかについて述べる。

1) 満足度

最初に、収納空間の満足度についてみてみる。図12によると、“満足”・“やや満足”が38.4%、“普通”が24.3%、“不満”・“やや不満”が32.8%おり、不満に思っている家庭が全体の約3分の1を占めていた。

ここでは、この満足度に影響を与える要因についてみてゆくことにする。満足度を左右するものとして、収納空間の大きさ、収納空間の利便性、所持品の量、使用者の収納技術

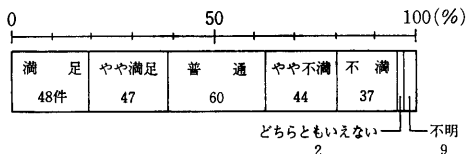


図12 収納空間に対する満足度

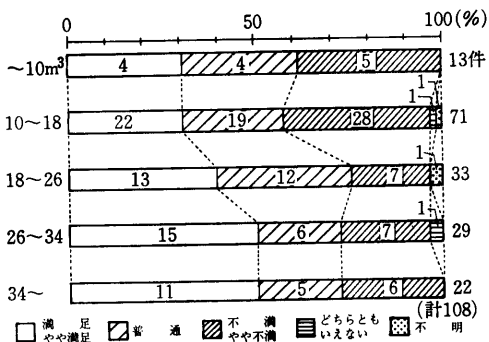


図13 満足度と収納空間の大きさ

の高さなどが考えられる。

図13は収納空間の大きさと満足度との関係を示している。この図より、収納空間が大きくなるほど、満足度が大きいことがわかる。収納空間の大きさが住宅の広さと有意な差があることがわかっていて。満足度と住宅の広さとの関係を見ると、図14のように、予想通り住宅が広い人の方が収納空間に満足している傾向があることがわかる。

次に、満足度は各家庭の生活歴の長さによって左右されると考え、満足度と妻の年齢との関係について検討した。結果は図15のとうりで、妻の年齢が高くなると、収納空間に不満を感じる人が多くなる傾向があるといえる。これは生活歴が長くなるほど、所持品が増えて収納しにくくなり、何らかの不満をもつからであると思われる。ただ、60歳以上になると、夫が停年になったり、子供達が独立したりで、生活がシンプルになり、所持品等も少なくなる。収納空間に対する不満も、他年齢層より改善されるようである。

押入れや納戸などに入りきらずにはみ出しているものがあるかないかと、満足度との関係を見ると図16のようになる。はみ出しているものがある人は、ない人と比べて収納空間に満足している人が少なく、不満に思っている人が多い。つまり、対象者ははみ出している状況に対して不満を抱き、はみ出させたくないと感じている。

さらに、満足度と納戸の有無との関係についてみてみる。結果は図17に示す通りである。この

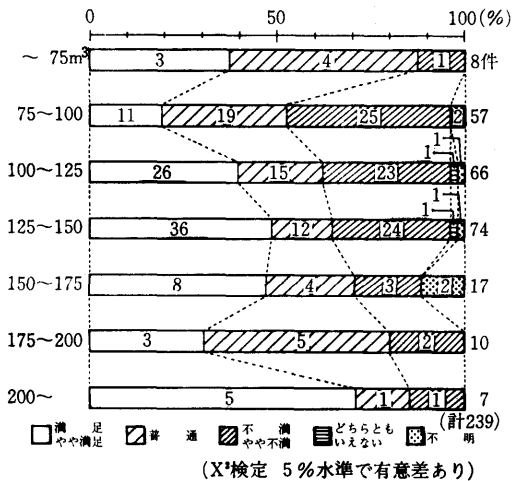


図14 満足度と住宅の広さ

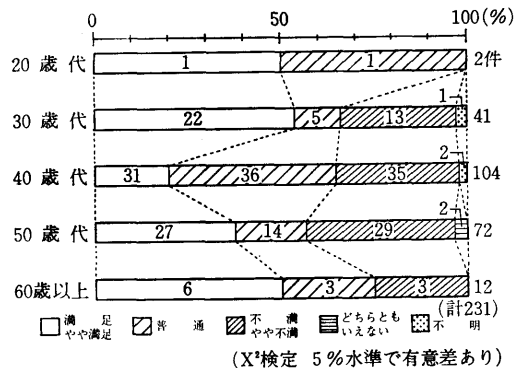


図15 満足度と妻の年齢

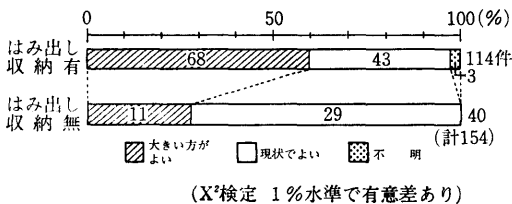


図16 満足度とはみ出し収納の有無

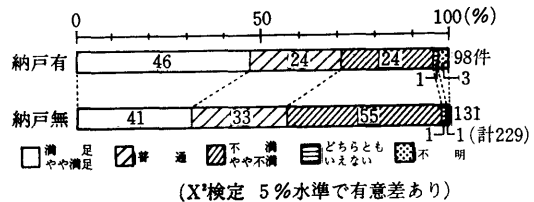


図17 満足度と納戸の有無

図より、納戸を所有している人の方が収納空間に満足している人の割合が多く、不満に思っている人が少ないといえる。さきにみた、満足度と収納空間の大きさとの関係にあわせて、対象者が納戸のような大きな収納空間を好み、収納空間の絶対的な大きさが大きい方がよいと感じていることがうかがえる。

次に“不満、・“やや不満、と感じている人の不満の内容であるが、表8に示された屋内収納

表8 不満の内容

屋内	全体的に狭い	44件
	納戸が欲しい	13
	整理がしにくい、棚や仕切りが欲しい	6
	つくりつけ家具・家具の置き場所が欲しい	5
	場所が悪く使いにくい	4
	特定の場所に欲しい	4
	分散して欲しい	3
	深すぎる	2
	屋外 全体的に狭い	9
屋外	出し入れがしにくい(口がせまい)	2
	その他	7

空間についての不満は、“狭い、”が44件(54.3%)と圧倒的に多く、次いで、“納戸が欲しい、”が13件(16.0%)となっている。これらより、収納空間の大きさが不足している対象家庭の実情がうかがえる。次に、“整理がしにくい、”があがっており、“深すぎ、”とあわせて、奥行き90cm



図18 収納空間の大きさへの要求

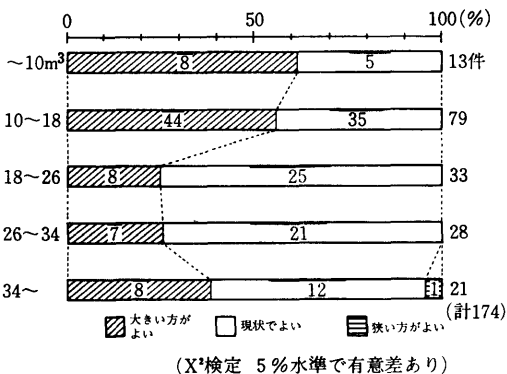


図19 大きさへの要求と収納空間の大きさ

場所が欲しい、“分散して欲しい、”など収納場所があったとしても、場所が悪いと使いにくいことがわかる。屋外についてもやはり“狭い、”が多く、収納空間の絶対量の不足が不満につながっていることがわかる。

2) 大きさの評価と不足分

前項1)で、収納空間の大きさに不満をもっている人が多いことがわかった。ここでは、対象家庭がそれぞれの収納空間の大きさについて、どのような要求をもっているのかより詳しくみてゆくことにする。

収納空間の大きさについて、“現在より大きい方がよい、・“現状でよい、・“現在より狭い方がよい、”の3つの項目から選んでもらった。

結果は図18の通り、“大きい方がよい、”とした人が100件(40.5%)で、“現状でよい、”が134件(54.3%)“狭い方がよい、”はわずか

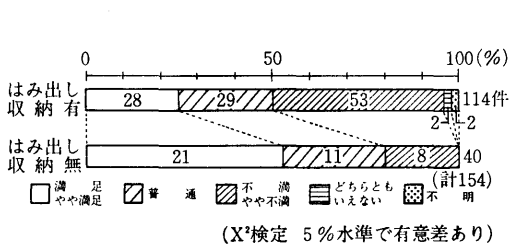


図20 大きさへの要求とはみ出し収納の有無

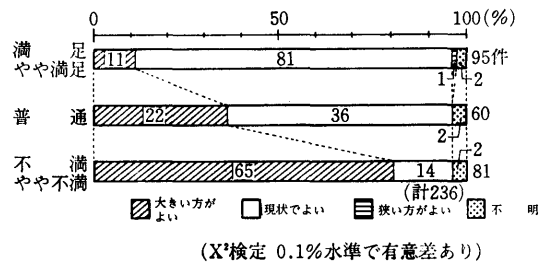


図21 大きさへの要求と満足度

1件(0.4%)であった。このことから、かなり多くの対象者が現在の大きさでは足りず、できればもっと大きい方がよいと思っていることがわかる。

ここで、この大きさへの要求と収納空間の大きさとの関係をみてみる。図19によると、収納空間が小さい人は“大きい方がよい、”とする傾向があることがわかる。収納空間がかなり大きい人にも“大きい方がよい、”とする者がおり、生活用品の量が増え、収納空間の量に対する要求が高くなっている状況がうかがえる。

はみ出しているものの有無との関係は、図20のようになる。はみ出しているものがない者に比べ、ある者には“大きい方がよい、”とする人が多い。やはり、はみ出しているものがある人はその現実をとらえ、できれば納戸や押入れなどの中に納めたいと思っているようである。

“収納空間の大きさ、”と“はみ出し収納の有無、”の2つの要因はさきにも述べた通り、満足度を決定する要因でもあった。(ただし、大きさへの要求と妻の年齢、大きさへの要求と納戸の有無との間には有意な差はみられなかった。)そこで、大きさへの要求と満足度との関係をみてみた。図21によると、収納空間について不満に思っている人には、現在より“大きい方がよい、”とする人が多いことがわかる。このことより、収納空間に対する不満の多くが、大きさが足りないということであり、量的に満たされていればほとんどの人が満足していることが考察される。このように、収納空間に対する対象家庭の評価は、ほとんどが大きさに関する評価であると考えてよいであろう。

以上のように、ここでは対象家庭の収納空間の評価についてみてきた。この中で、対象家庭のほぼ3分の1が収納空間に対する不満をもち、特に収納空間の狭さおよび収納しきれない物品の存在がマイナスの評価を与えている様子がうかがえた。

4. 結論と考察

以上より、都市中流一戸建住宅の収納空間の問題点および今後のあり方について、その結論をまとめ考察を加えることにする。

調査の結果から、都市中流一戸建住宅の収納空間の実状をまとめると次のようになる。

- ①都市一戸建住宅の収納空間は屋外収納空間と屋内収納空間として、前者平均10.3㎡、後者約21.7㎡^(注8)の大きさを占めていた。
- ②各家庭は多くの物品を所有し、その増大化に伴って、収納空間の絶対量を増やすことで対処しようとする傾向がうかがえた。

③収納空間タイプの中でも、納戸、屋根裏部屋指向があり、特に納戸は約4割もの家庭が所有していた。

④各家庭とも、各種タイプの収納空間で物を収納していたが、それにもかかわらず、約半数の家庭に収納しきれない物品があった。

⑤収納空間に対する各家庭の評価では、不満足層が3分の1存在し、特に収納空間の狭さおよび前述④の収納しきれない物品の存在が、マイナスの評価を与えていた。

以上が今回明らかになった対象地の収納空間の実状である。次に、これらの現実から都市中流一戸建住宅の収納の問題点を考察してみたい。

先ず第一の問題点として、物の持ちすぎ傾向が指摘される。今回の調査において、各家庭は収納物が増える状況に対し、収納空間の絶対量を増やすことで対処しようとしていたが、収納物の使用頻度をみると、“ほとんど使わない”ものが、かなり多かった。これらの中には、本やアルバム類、美術品など記念品的性格をもつものも含まれるが、一方では日常生活を営むうえで必ずしも必要でないもの、家庭が所有するに値しないものも含まれていた。これらを所有し続けることは、現在の都市一戸建住宅では居住水準の低下につながると考えられるが、今回の調査では、これらに対する自覚や反省がほとんどなかった。また今日、生産者側の宣伝と、各家庭の購買力の上昇から、無秩序に物品を購入する傾向がうかがえるが、それらの物品が本当に必要なものであるかどうかを見きわめる目が消費者に是非必要であると思われる。

第二に、屋根裏部屋等特殊収納空間の問題についてであるが、今回の調査では、247戸中18戸の家庭が屋根裏部屋を、15戸が床下収納庫を所有していると答えたにすぎなかったものの、当調査結果からも、収納空間の絶対量拡大指向がうかがわれる一方、近年の建売住宅のプランの傾向などから考えて、屋根裏や床下などの空間を収納空間に充てようとする傾向が出てくると思われる。しかし、屋根裏部屋の収納物の使用頻度をみると、“ほとんど使わない”ものが3割以上を占めている実態が明らかになっている。これは屋根裏部屋が、一度その中へ物を収納してしまうと、とり出しにくく、使用されなくなるという性格をもつからであろう。屋根裏部屋や床下収納庫には、このような問題があり、収納空間の量を増やすために、むやみにこれらを設ける前に、使いやすさや本当に使いこなせるかなどを十分検討する必要があると考えられる。無用の長物を収納するため、大切な居住空間を半永久的に占有してしまうほど、無駄なことはない。地域ぐるみのリサイクルシステムの利用も含め、これらの収納品は、家庭外に出され、適当に再利用、処分などされるべきであろう。

屋外のはみ出し収納品には、現在の生活からはみ出し、処分寸前の物品が多く含まれていたが、これもリサイクルシステムに乗せてゆけば、はみ出し収納も解消でき、収納物の余命も有効利用することができる。

住宅の適切な収納空間を考える場合、その受け皿として、地域や自治体ぐるみのリサイクルシステムの必要性和その育成が無視できない条件として指摘できる。

第三に、収納空間の技術的、形態的なあり方の問題である。ここで示された形態上の問題は①収納空間として固定型と移動型が、我々の生活の中で、どのように採用されるのが望ましいか、②近年の納戸指向が示しているように、収納空間の集合化と分散化をどのように考えればよいか、などの他、③伝統的押入れの改善の問題などがある。

③については、生活の現状に合ったものに改善されてゆくことが早急に望まれるが、①、②に

については、ここで早急に方向が示せる種類の問題でもない。今後の課題として残される問題である。

注1) 屋根がなく、体積が計測できない場合が多く、ガレージは全てこの中に含めて計算した。

注2) 2畳以上の大きさの収納空間。

注3) 回答者が納戸と答えていても2畳未満のものはこれに含めた。

注4) 特別記入のない場合、収納空間の体積は、標準的日本住宅のモジュールに従い、押入れの天井高を180cm(1間)、奥行を90cm(半間)に換算し、計算している。

注5) 今回の調査で、床下収納空間所有者が15件あったが、詳しく調査していないので分析からはずした。

注6) ここで言う不用品割合とは、前に用いた使用頻度分類D(ほとんど使わない)の収納物を、体積にしてどの程度含んでいるかを示す概念である。収納物品に占める不要品の割合を10%単位で答えてもらった。家具内の収納物は、つくりつけの各収納空間のそれと比べ、一般に複雑で細かいものが多い。使用頻度などの調査では空間計画にむすびつける研究目的に照して、この程度の把握のし方で十分と考えた。

注7) *世帯主の妻である。

注8) 仮設的物置26.8㎡は含めていない。

参 考 文 献

- 1) 総理府統計局：住宅統計調査報告，昭和43年版，佐々木信親商店（1970）
- 2) 建設省；昭和59年版建設白書，p163（1984）
- 3) 総理府統計局：住宅統計調査報告，昭和53年版，日本統計協会（1980）
- 4) 経済企画庁国民生活局：くらしの統計'85，大蔵省印刷局，p12（1985）
- 5) 経済企画庁国民生活局：くらしの統計'85，大蔵省印刷局，p12（1985）
- 6) 総理府統計局：家計調査年報，昭和58年，日本統計協会，p180（1984）